やまと万葉がたり

大伴の御津の泊に船泊てて龍田の山を何時か越え行かむ

作者未詳〈遣新羅使〉（巻十五・三七二二）

毎年、上半期は県外への出張や講座が多く、いつも近鉄電車に揺られて奈良へ帰って来ます。奈良の山々に囲まれた、正に青垣山たる風景や美しい田畑を見ると、「帰ってきたなぁ」とほっとした気持ちになります。私は奈良県の出身ではありませんが、奈良の山々を見るとなんだか安心するのです。車窓に映る生駒山、若草山、葛城山、二上山、三輪山、畝傍山……。奈良盆地ならではのこの美景が、私は大好きです。

今回の歌は、新羅に使節として派遣された遣新羅使たちが詠んだ一首で、新羅から筑紫に到着し、そこから船で奈良の都へ帰る途中、播磨に至った時の歌です。任務によって遠い異国の地に赴く遣新羅使たちは、もう二度と故郷や家族に会えないかもしれないという覚悟で旅立ちました。彼らの歌は、旅立ちから帰国までが一つの歌群として構成されており、今回の歌はその歌群の最後に位置しています。長かった船旅も終わり、ようやく故郷に近づいてきたその感動は、海外旅行ですら容易になった私たちには、計り知れない喜びであったことと思います。

「大伴の御津」は、現在の大阪市周辺の浜辺に設けられた港の一つとされている場所で、かつて大伴氏の所領であったことによる呼称といわれています。大伴の御津まで船でたどり着けば、大和はもうすぐです。龍田山は、大和と河内を結ぶ交通の要衝で、いわば、難波・河内方面と大和との境界の山が龍田山でした。大伴の御津に船を泊めて、龍田の山をいつ越えてゆくのだろう、というのは、故郷である大和へ足を踏み入れるのを今か今かと待ち遠しく思う、はやる気持ちによるものといえます。龍田の山を越えた先には、愛する故郷と家族が待っている――。古代の人びとが見つめた山に思いをはせながら、梅雨の晴れ間に、龍田古道の散策に出かけてみてはいかがでしょうか。

【訳】大伴の御津の港に船どまりして、龍田の山を何時越えて行くのだろう。

（奈良県立万葉文化館主任研究員・大谷歩）

＝次回は26日

やまと 万葉がたり

吾妹子が 形見の合歓木は 花のみに 咲きてけだしく 実にならじかも

大伴家持(巻八・一四六三)

万葉文化館の庭園では、さまざまな万葉植物を育てています。ちょうど今、ネムの花が見ごろを迎えています。淡い紅色の長い雄花が印象的な可愛らしい花です。今回は、そのネムにちなんだ恋の歌をご紹介します。

この歌は、紀女郎から贈られた歌に対する大伴家持の返歌です。女郎は「昼は咲き夜は恋ひ寝る合歓木の花君のみ見めや戯奴さへに見よ」(一四六一)、昼は開き夜は恋いつつ寝るネムの花を、持ち主だけが見ていてよいのでしょうか、あなたもご覧なさい、という歌と、茅花にまつわる歌(一四六〇)とともに、ネムの花と茅花を家持に贈っています。

ネムという名前は、夜に葉が閉じて眠っているように見えることから名付けられたともいわれています。この歌には、ネムの葉が昼は開き夜は閉じるという生態が捉えられていて、万葉びとたちの自然に対する細やかな観察眼がうかがえます。

女郎の歌の真意は、ネムの生態に寄せて、あなたのことを恋いつつ眠っている私のことを、一緒に贈ったネムを見て思い出してください、というものです。女郎は「万葉集」の中でも機知に富んだ恋歌を得意とする女性です。彼女から贈られてきた恋歌の挑戦状に家持は、あなたがお贈りくださった形見のネムは、花ばかり咲いて実にならないのでしょうと返します。「実にならない」というのは恋歌の一種の定型表現で、二人の恋が成就しないことの例えです。つまり、女郎の思いは見せかけだけのものであることを非難しているのです。非難するということは、言外に自分は本気であったのに、ということをにおわせ、「実にならじかも」とすねてみせるわけです。

家持のこの歌に対する女郎の返歌は、残念ながら記録されていません。女郎だったら何と返すだろうか。想像は膨らみます。そして、万葉びとたちの、自らの思いを植物に託すその手法の妙に、いつも脱帽しています。

【訳】あなたの形見の合歓木は花ばかり咲いて、おそらく実にはならないのでしょうよ。

(奈良県立万葉文化館主任研究員・大谷歩)

=次回は7月10日